

# 職業教育現場における学生の学習スキル向上支援の取組み

— 「学習スキル講座」を効果的に用いて—

黒木 豊域<sup>1)</sup> 中島 たまみ<sup>1)</sup> 松永 繁<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 日本福祉教育専門学校

<sup>2)</sup> 新潟医療福祉大学

## How to give an effective support for students who are in need of obtaining basic study skills at vocational schools by providing study skill trainings

Kurogi Toyoki<sup>1)</sup> Nakajima Tamami<sup>1)</sup> Matsunaga Shigeru<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Japan Welfare Education College

<sup>2)</sup> Niigata University of Health and Welfare

**Abstract** : A 2012 study conducted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology has pointed out that “slow academic performance” is one of the main reasons for university dropouts. The needs for First Year Experience at universities and vocational schools have become well recognized, and it has become widely established in Japan. Although schools of vocational education for welfare also provide First Year Experience for students’ vocational education and motivation, their early school days may be going by without satisfying students’ need for obtaining study skills. In this paper, it is verified that supports for study skill acquisition for students who have not acquired basic study skills leads to improvement of learning motivation. We will report the results of the study skill course which we held, based on the understanding of the fact that the study skills are not something that can be acquired simply by taking a course, but that supports are essential.

**Key Words** : First Year Experience, study skills, diversity, recurrent education, strength approach, empowerment

**要旨** : 文部科学省の2012 (平成24) 年度の調査で、「学業不振」が大学の退学理由の主な要因の一つとなっていることが指摘されている。多様な学生が入学する大学や専門学校では初年次教育の実践が求められており、わが国において広く定着されるようになった。また福祉の職業教育現場においても職業人教育やモチベーションの維持・向上のための初年次教育が行われているが、学習スキル習得の支援を必要とする学生のニーズが必ずしも満たされないまま学校生活が進んでいくことが示唆される。本稿では学習スキル未修得学生を対象に学習スキル習得の支援を行うことで学習意欲の向上に繋がることを検証する。スキルの習得は、単に講習を受けることで身に付くものではなく、身に付くまでの支援が肝要であることを踏まえ学習スキル講座を開催した結果を報告する。

**キーワード** : 初年次教育、学習スキル、多様性、リカレント教育、ストレングスアプローチ、エンパワメント

## 1. 研究背景と先行研究

初年次教育の先進国であるアメリカの大学では、高等教育を学ぶにはそれなりの学習スキルが必要であるという認識がある。アメリカの大学では、リカレント教育を含め幅広い年齢層の学生や、文化、社会的困難、言語の異なる学生が学んでいる。入学にあたっては外部の試験団体の結果（ACT、SATなど）を用いて一定レベルの学力を確保するスクリーニングが行われるものの、このように多様性が存在する大学の中で、必ずしも全ての学生が大学の勉強についていくために十分な学習スキルを持ち合わせているわけではない。したがって入学した学生が大学で必要な学習スキルやアカデミックスキルを習得できるよう、1970年後半から1980年代前半にかけて、多くのアメリカの高等教育機関で初年次教育（First Year Experience）が導入されてきた。<sup>1)</sup> 現在においては、初年次教育の受講は4年制大学の52%において必須科目として扱われており、<sup>2)</sup> 87%が卒業単位として認められている。<sup>3)</sup> また、U.S.Newsは初年次教育が優れている学校を検索できるようランキング付けしたサイトを提供しており、初年次教育の優劣は入学希望者にとって大学選びの有益な判断材料の情報となっていることが読取れる。<sup>4)</sup>

日本においても初年次教育の必要性が認知されてきており、2000年代以降急速に私立高等教育機関や国公立大学で導入されてきた。2007年には国私立大学における初年次教育の普及率は97%近くに上っており、山田はその背景に多様な学生が私立大学を中心に入学してきていることを指摘している。<sup>5)</sup>

しかし一方で、文部科学省の報道発表「学生の中途退学や休学等の状況について」によれば、2012（平成24）年度の調査で日本の公私大学で中途退学の主な要因の一つに「学業不振」（14.5%）があげられており、「高校と大学における教育のギャップに学生が対応できていない可能性」が示唆されている。<sup>6)</sup> 「学業不振」が中途退学の理由として、経済的理由および転学に次いで3番目に上げられているということは、初年次教育が一定の学生のニーズを満たしていない可能性があるといわざるを得ない。

先行研究に拠れば、日本の大学や高等教育では、「学習スキル」とはアカデミックスキルと同義語と

して使用されている傾向があり、一般的に学習スキルとはアカデミックスキルのことを指す場合が多い。よって、本稿では、学習スキルとアカデミックスキルについて以下のように整理した。

**学習スキル：**予習、復習、および授業の受け方、ノートのとり方、資料のファイルの仕方など、通常の授業を受けるに伴う基本的スキル

**アカデミック・スキル：**レポートや論文の書き方、文献の探し方に必要なスキル、及びPCソフトに関するスキル

社会福祉士及び介護福祉士養成教育を行うA専門学校においても、学習方法が十分に獲得できておらず、学習が進まないことで学習意欲が低くなってしまっている学生の存在が察せられた。それらの学生の中には、筆記用具を持たずに学校に登校する学生や、居眠りを続ける学生、ノートを取らずおしゃべりをしている学生、試験勉強をせずに定期試験を受ける学生などがいて、一見すると学習態度の問題のようにとれ、「しかる」「励ます」「目標設定をする」などが主な関わり方となっていた。しかし、いずれも学生のモチベーション向上には困難が生じ、目に見える変化に乏しい状況であった。

しかし、検討を進める中で、定期試験の結果は学生の「やる気」の問題ではなく、学習スキルの問題であると示唆される事例がいくつか確認できた。例えば、テスト前に勉強をしようにも資料が管理できていないために勉強が出来ず、結果、放棄するという事例が見られた。また、穴あけパンチを一度も使ったことが無いために使い方を知らず、ファイルに保管できないという状況も見えてきた。

## 2. 研究目的

学習スキルの獲得の支援が学力の向上、モチベーションの向上へとつながるとの仮説を立て、支援を行った実践事例の考察を行う。

## 3. 研究方法

### (1) 方法

仮説に基づいたプログラムによる実証講座の開催を含む一連の支援の実施。

#### ① 保護者との三者面談

- ② 学習スキル講座
- ③ 講座後の定期的なフォローアップ
- ④ 5回の科目補講

## (2) 対象者

A 専門学校に在籍している学生を対象とした。対象者の選定は以下の通りである。

- ① 対象科目で合格水準に届かなかった者、6名
- ② その他、病気や傷害で出席不足となり補講終了した者、2名

以上合計8名が講座の対象となった。

## (3) 期間

2019年10月15日～2020年1月14日

## (4) 分析方法

学生の話や態度の観察等による質的分析を採用し、学生の学習への取組み行動と意識の比較を行った。

## (5) 倫理的配慮

A 専門学校校長に趣旨や方法、学生への倫理的配慮について説明し、了承をもらった。また、対象学生に対しても、事例報告として学術誌、学会等で発表すること、対象者が特定されないこと、いつでも協力の撤回ができること、それにより不利益が被らないことを説明した。

実施や分析については日本社会福祉学会倫理規定に沿って行った。

## 4. 学習スキルの獲得の支援

### (1) 保護者との三者面談

学生と保護者には、学習スキル講座の目的を説明し理解と協力の承諾を得て実践が開始された。

### (2) 学習スキル講座：内容と目標

高等教育で必要な学習スキルは、文献や資料の探し方やレポートの書き方、発表の仕方など多岐にわたるが、今回は「初級講座」という位置づけで、テストで高得点を狙うための基本的な技術の取得を目指し、次のような目標を掲げた。

- 専門学校・大学での学習の特徴を知り、各授業

の対策を立てることができる。

- テキストの読み方のコツが身につく。
- ノートを活用できる。
- テストに向けた効果的な記憶法が身につく。
- 配布資料のファイリングの習慣が身につく。

その内容を次のような構成で全3回の講座を企画した。

#### 第1回

- 高等教育の授業の特徴への理解
- シラバスの利用方法
- 予習の仕方

#### 第2回

- 授業の受けかた  
テキストの読み方  
ノートのとり方
- 配布プリントの保管の仕方

#### 第3回

- 復習の仕方  
マークの仕方  
記憶の定着
- テストの準備

### (3) 定期的なフォローアップの実施

この講座では学習効果を高めるためのポイントを学び、実際の授業の中で実践することを通じて身につけることが強調された。そのため講座自体は3コマで構成されたが、訓練時間は約3ヶ月を用いた。学習スキル講座の3週間で終了すると、図1のようなチェックリストを配布し、2ヶ月間に渡り学生が習得すべきスキルを用いているかどうかを確認するため学生に報告を義務付けた。

また、スキルを身につけるために、フォローアップは段階的におこなった。講座終了後の2週間は毎日報告させ、次の2週間は週3日を報告日とした。更に、その後の1ヶ月は週1回の報告を求めた。

また、報告のたび教員が押印することで報告の確認とした。(図2)

このフォローアップにおいて、重要視したところは「学生が取り組んでいる」という事実である。学習スキル習得前の学生にとっては、ストレスを感じる取り組みであり、忍耐を要することでもあった。したがって学生が自分の変化や成長を楽しむことが支援



図1 チェックリスト

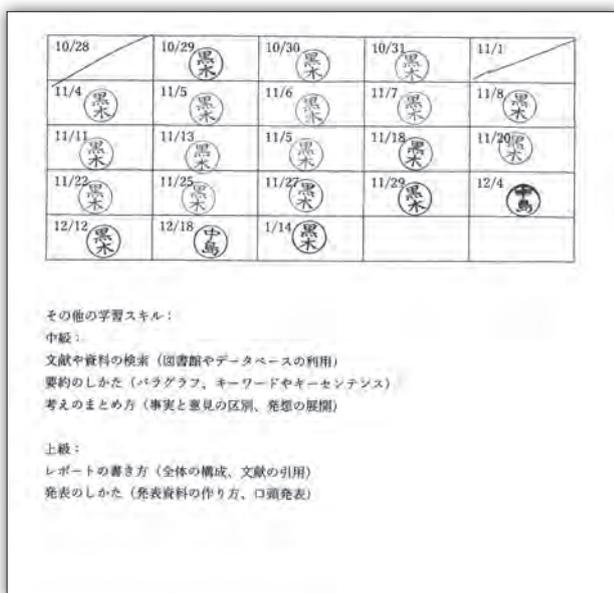


図2 フォローアップ・シート

につながると考え、ソーシャルワークのストレングス・アプローチに拠り、エンパワメントを行ってきた。たとえば、ノートの中に見られる小さな工夫があると、そこを評価して学習スキルを実践できていることを両者で認め、変化と成長を一緒に確かめることでエンパワメントの機会とした。また、たびたび習得には忍耐が必要であることを口頭でも伝え、引き続きチャレンジするように励ました。

#### (4) 補講の実施

支援対象の学生に対し全5回の補講を行った。これは、科目の理解を深めるための補習であったが、実際に学習スキルをどのように用いるかの実施訓練を兼ねていた。

補講では、授業内で実際にテキストを用いて予習することからはじめ、授業を展開し、その後小テストとその振返りを行った。

#### (5) 講座の終了

全ての対象学生に対し、チェックリストを用いてこれまでの取り組みの評価を行った。学生と面談を行い、何ができるようになり、何についてもっと努力が必要かを本人の視点から振返った。そして最後に講座の修了証(図3)を手渡し、達成できたことを祝った。一つのことを熱心にやり遂げたことを形として残しておくことで、学生の更なる成長へのモチベーションとする目的である。



図3 コース修了証

### 5. 結果

#### (1) 学習スキル講座の出席とフォローアップの達成

学習スキル講座は、対象すべての学生が出席した。しかし、フォローアップ期間に1名が経済的理由で退学したため、残りの7名がフォローアップを終了し、修了証書を受け取った。

#### (2) 学生の変化

対象学生には学習スキルと行動に以下の項目において次のような変化が見られた。

**(a) ファイリング**

受講前は、授業で配布された資料などを、乱雑にバッグやロッカーに入れていた。そのため、紛失や課題の未提出などが目立っていた。

受講後は、科目ごと、回数ごとにファイルするようになり、中には毎日重いファイルノートやケースを持参する学生もでてきた。登校時の学生のバッグが小さなポシェットサイズのものからA4サイズファイルが入る大きめバックへと変わっていった。

**(b) ノートの工夫**

受講前は、配布資料にメモをせず、科目ごとのノートも準備していない等の状況があった。

受講後は、「学習スキル」の資料に沿って、「まねる」ことから始め、ノートを取り始めた。当初は、授業を受けていても空白が目立ち、大きく単語が殴り書きされている状態だった。次第に、マーカーなどを活用したり、色分けしたり、イラストや図などを書き入れたりなど、学生個々で創意工夫がみられるようになった。

**(c) 授業態度**

受講前は、授業中に「居眠り、私語、スマホいじりなど」がよくみられ、授業に集中していない、授業を受ける状態ではなかった。

受講後は、上記のような授業態度は徐々に減り、ノートや資料に書き込む様子がみられるようになった。

ある学生が『授業中は（ノートをとったり、聞いたり、意見を言ったりするので）、忙しい（ことがわかってきた）』と話してくれた。彼らの授業に対する姿勢の変化を表すものだといえる。

**(d) 学習準備（予習・復習）**

受講前は、教材や筆記具を忘れて、課題の未提出が少なくない状況がみられた。また、小テストの結果や授業内容を反芻しながら進めていく際に、「わからない」「覚えられない」と話していた。このような状況から予習・復習の必要性の認識は非常に希薄であったと思われる。

受講後は教材や筆記具（マーカーなどが加えられて）を準備し、受講するようになった。しかし、学生からの聞き取りによって、受講後も予習・復習という点については、「必要性はわかったけれど、行動が伴わない」状態であることがわかった。習慣化していくためには、更に時間とフォローアップが必要であると認識させられた。

**(e) 心理面（意欲など）**

講習前は、無表情、うつむいているなどの様子から、講習中から徐々に笑顔がみられたり、目を合わせて自ら発言する様子がみられるようになった。

受講後は、ゆとりある表情もでてきて授業に対しての印象にも変化がみられた。

「今までは、『試験勉強』をしなくてははいけないと

表1 受講前と受講後の学生の比較

	受講前	受講後
ファイリング	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料、乱雑にバッグやロッカーに入れていた</li> <li>紛失や課題の未提出などがあった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>科目ごと、回数ごとにファイル</li> <li>毎日ファイルノートやケースを持参</li> <li>登校時のバッグが小さいものからA4サイズファイルが入る大きさに変化</li> </ul>
ノートの工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料にメモをしない</li> <li>科目ごとのノートを準備していない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ノートを取り始めた</li> <li>マーカーなどを活用</li> <li>イラストや図などの工夫</li> </ul>
授業態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>居眠り、私語、スマホいじり</li> <li>授業に集中していない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>居眠り、私語、スマホいじりの減少</li> <li>ノートや資料に書き込む様子</li> <li>「授業が忙しくなった」</li> </ul>
学習準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材や筆記具を忘れ</li> <li>課題の未提出</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「必要性はわかったけれど、行動が伴わない」状態</li> </ul>
心理面	<ul style="list-style-type: none"> <li>無表情</li> <li>うつぶせ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゆとりある表情へ変化</li> <li>目を合わせた発言</li> <li>授業に対する印象に変化</li> <li>「試験勉強」に取りかかりやすくなった</li> <li>授業中の単語が分かるようになった</li> </ul>

思っている、何から、どのようにやればいいのかわからなかった。今は、(ノートがある、科目ごとに資料もファイルしているから) すぐに始められる」

「(授業や演習などで) 教員やクラスメートが言っていることがわかるようになってきた。」

など、楽しそうに話してくれる言葉に、成長の喜びや授業への意欲がうかがえた。

## 6. 考察

今回の取組みを通じて、学生に対し授業を教える以前に高等教育成就に必要な学習スキルを身につけさせる重要性が確認された。しかし、今回の研究では本稿で述べられた学生の変化が実際にどれほど学力とモチベーションの向上に繋がったのかは明確に示すことはできなかった。また、それらの変化は①今後も維持できるのか、②具体的な成績の向上に繋がるのかについても研究が至っておらず、今後の重要な課題となっている。

今回の学習スキル講座を含む一連の支援で効果が生じた理由として、①開催のタイミング、②保護者を含めた3者間で講座の意義の共有、③フォローアップ、④学科の体制などが重なり功を奏したと考えている。単にスキルについて講義するだけではスキル習得ができるわけではなく、一貫した支援が必要である。特にフォローアップでは、一人一人を対

象に面談を繰り返すため、一教員のみではなく学科全体として取組んでいける枠組み作りや、情報・状況共有の工夫が不可欠な要素であると考えられる。

## 参考文献

- 1) 山田礼子 (2009) 「大学における初年次教育の展開 — アメリカと日本」『*Journal of Quality Education*』第巻2、pp. 157-174。
- 2) D. G. & H. J. M. Young (2014) “2012-2013 National survey of first-year seminars: Exploring high-impact practices in the first college year,” *Research report*, 第4 (USA)。
- 3) B. O. & F. P. P. Barefoot (1992) “The 1991 national survey of freshman seminar programming: Helping first-year college students climb the academic ladder,” *Monograph*, 第10 (USA)。
- 4) U.S. News (随時更新) “First-Year Experiences,” (USA) <<https://www.usnews.com/best-colleges/rankings/first-year-experience-programs>> (アクセス日: 2020年5月10日)。
- 5) 山田礼子 (2005) 『一年次(導入)教育の日米比較』東信堂。
- 6) 文部科学省 (2014) 『学生の中途退学や休学等の状況について(報道発表)2014年9月25日』<[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf)> (アクセス日: 2020年5月10日)。
- 7) 石倉健二、他 (2008) 「ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題」『*長崎国際大学論叢*』pp. 167-177。

受付日: 2020年5月10日